

福沢諭吉の思想形成と医学

—その文明論との関連—

都倉 武之

慶應義塾福澤研究センター

福沢諭吉は一般に、啓蒙思想家、教育者として知られるが、その思想形成に最も大きな影響を与えた体験の一つは、1855-58年の大坂適塾での緒方洪庵の元での蘭学修業であった。

緒方洪庵は、学者としては、最新の蘭書に取り組み、医学用語の翻訳にも貢献、塾生達に未知の学問分野を開拓する姿勢を示し、また教育者としては、平易で説得的な記述の姿勢や、塾生への講義態度、生活も含めた総人格的教育などで感化を与え、蘭方医としては、知識を欠く一般人への種痘普及の努力や解明されていないコレラの治療法の模索などの誠実な姿勢を貫くなど、広範囲にわたって福沢に影響を与えたことが知られている。

その一方で、福沢自身の著作の中に多く医学への言及、医学的用語や知識の応用が用いられていることはほとんど顧みられていない。

本報告では、福沢著作中に見られる福沢の医学に関連した用語法、比喩などを紹介し、それが福沢の適塾での緒方洪庵指導の下での学問修得体験と相まって、福沢のあらゆるものの見方の基盤となる視座へと昇華していったことを考察したい。

たとえば、下記のような形で医学的表現が見られることにそれは端的に表れている。

- ①『文明論之概略』巻之一(1875年)：現在の世界の国々の文明の状況を、人間の「健康」に喩えて説明する。無智無徳の人を「文明の世の疾病」と捉えたとき、完全な文明の状態は「十全健康」と呼ぶべき状態であるが、「一点の所患なく生れて死に至るまで些少の病にも罹らざる者ある可きや」と、現実にはそのような人は存在しないと述べ、「今世の人は仮令ひ健康に似たるものあるもこれを帯患健康と云はざるを得ず」とし、この例から「国も亦猶この人の如し、仮令ひ文明と称すと雖も必ず数多の欠典なかる可らざるなり」として、相対的に、より文明の国を世界に求めて目標にすることが必要と論じる。(なおこの「十全健康」「帯患健康」という表現は、明記されていないが洪庵の『病学通論』からの引用であることが知られている)
- ②『時事小言』(1881年)：「天然の民権論」を実現するためには「人民の財産権利を平等一様に分布する」必要があるという「正論」に対して、それは「此世界の人類を従前円満無欠の者と想像したものでもし本当にそうであれば法律、兵備、税金なども不要となる。しかし現実はその異なつて悪人がおり、世の中は「病者と無病者と相混するが如し」とし、「人の天然は無病なり」という根拠から「医術は無用」と主張するようなものと主張し、「政法は悪人の為に設け、医術は病人の為に備るものなり」と、民権一辺倒の極端論を批判する。
- ③『福翁百余話』(1901年)第17話「物理学」：「西洋医」と「古流医」を比較し、「医学上有形の方便の達する所(外科的処置)は西洋医にのみ「明」があり、古流医は「盲者に異ならず」とし、その違いは物理学(ここでは「自然科学」というほどの意味)に基づくか否かであると把握している。医学においてはその違いが結局「内部百般の病をも外科の門に統御する」ことに繋がると説明し、自然や社会のあらゆるものごとと同様に見れば、「政治経済等今日無形の人事と称するものをも遂には物理の中に摂取して洩らさざるに至る」との例を挙げて、「物理学」が「人間万事を包羅する学問」と位置づける。

以上は数例に過ぎないが、福沢がその思惟方法の重要な基盤として医学的知識・発想法を持っていたことがわかる例である。とりわけ、物事を物質的な「形体」(外形)と無形の「精神」(内面)に分類し、形体と精神の関係性を考察するという福沢の生涯を通して見られる思惟方法が、この医学的素養を基盤としていると考えられることを論じたい。